

# 第1章 戦場

## 樺太からの引き揚げ③ 人生を狂わされた戦争

かさまつさだこ  
笠松貞子さんのお話から

○樺太 表紙裏地図  
○本斗町 表紙裏地図

○真岡 表紙裏地図  
○青酸カリ 猛毒の薬品。猛毒で、致死量は〇・一五グラム。

○自動小銃 引き金を引いている間、自動的に連続的に弾丸が発射される銃。

○防空壕 航空機による空からの攻撃から身を守るためにつくった穴や地下室。

私は昭和二年（一九二七年）九月に樺太の本斗町で生まれました。生家は大正十四年（一九二五年）にこの地で、金物店を始めました。私たちは、昭和二十年八月二十日に、万が一、樺太にソ連が入ってきたらと、中学一年生の弟や父を残して、母と娘たちのみで引き揚げてきました。

その八月二十日は、樺太の真岡に爆弾が落とされ、郵便局の九人の乙女が青酸カリを飲んで、「さようなら、さようなら。」と言って薬死したと聞いています。今は、稚内に九人の乙女の碑が建っています。そのときに、ソ連兵が入ってきて、真岡の男性たちの中には、港の防波堤に立たされ、自動小銃でバンバンと殺された人もいたと聞いています。私は女学校を出ていますが、先生もそこで殺されたという話も聞いています。そういう悲しい話がかかりました。

真岡の銃撃があったその日の午後から、私のまちにも飛行機が飛んできて、爆弾が落とされました。遠い方で爆弾の音がして、それからはもう爆弾がおっかなくてがたがた震えています。それから、ラジオが何かのニュースで本斗の方に爆撃機が向かっていると聞いて、私たちは家の庭に掘ってあった防空壕に親子全員で入って、その中でドーンという爆音を聞いていました。

防空壕から出て、すぐに荷物をまとめました。着の身着のままの姉二人、母、私と妹の五人で、防空壕から出てすぐ、父親、弟、兄、それからうちの店で働いていた親戚の方の四人に、

○着たきりスズメ 着たきりであること。また、その人。

○コンポート 果物や菓子かしを盛もる、足つきの皿。

「これでお別れですね。早く帰ってきてください。ぜひ、すぐ帰ってくるように。」と、そこで親子の別れをしました。

そして、船がもう決まっていたから、すぐ船にということでも港に急ぎました。もう着たきりスズメで、今考えるところも少し何か荷物を持ってきてもよかったのではないかと思うのですが、みんな長年住んだふるさとから離はなれるということのくやしき、悲しきでもう頭がおかしくなっていたのだと思います。大した荷物も持たず、港に向かったのです。でも、私には、大切な荷物が一つあったのです。それは、ガラスのコンポートです。私は何よりもそれを大事にしました。それを置いてくるのがとてもくやしくて、それを手に持ってきました。船に乗っても大切にしています。が、稚内わっかないで降りるときに船員さんふつうにあげてしまったのです。もう引き揚げで普通の頭ではないのです。札幌さっぽろに来てからそのコンポートに似たものがデパートに売っていたときは懐なつかしくてたまりませんでした。私はすぐ買って、それを今でも大切にしています。

引揚船ひきあげせんの出航が夜の六時だったのですが、なかなか発たちません。甲板かんばんに出てみたら、弟が



イメージ図

防波堤で銃殺される人々

人生を狂くるわされた戦争

○埠頭 船をつけ、人の乗り降りや貨物の積みおろしをするところ。

○金物 金属性の器具。

○産婆 今の助産師。

リュックサックを背負って、船の埠頭のところを歩いていました。私たちを見送りに来たのです。まだ中学一年生の弟です。これを見たときには、もう悲しくて悲しくて、みんなで泣きました。本当は連れていきたかったのですが、女性と子どもしか乗れないことになっていました。私の父は町内会長もやっておりましたので、違反してはいけないということでこれを守ったわけです。とにもかくにも弟がかわいそうでした。

うちは金物店をやっていたために、買い物に来ていた船員にお願いして、船長室やその近くに寝かせてもらいました。ほかの人たちは、みんな船底で、ぎゅうぎゅう詰め横になっていました。

また、船でお産をする人もいました。「産婆さんはおりませんか。産婆さんはおりませんか。」という声を大分聞きました。船での出産は何かと大変だったと思います。船はずいぶんと揺れ、稚内に着いたのが次の日のお昼ぐらいでした。のどが渴くし、しかも何も食べることができず、本当に大変でした。

稚内の駅前にあったお店屋さんの二階を一部屋借りました。畳も何も敷いてありませんでしたが、そこで、父たちが帰ってくるのを一か月ほど待ちました。その間私たちは、父が逃げ



イメージ図

ガラスのコンポート

帰ってくるのを期待して、毎日、稚内の波止場に行きました。それでも父たちは帰ってきませんでした。稚内で待つことをあきらめた私たちは、倶知安のいとこを頼って、五人で向かいましました。そして、倶知安で五年間過ごしました。

二年後に父たちが帰ってきましたが、私たちには一銭の貯えもありませんでした。姉たちは裁縫ができたので、その代金で食べさせてもらったり、農家に行って働いて、そのお金で食べさせてもらう、そのような生活がずっと続きました。本斗にいたときは家が裕福で何の不自由もなくすごしていましたが、引き揚げてからというものはどこでもなく大変な苦勞をしました。

私はどうとう上の学校に行けず、女学校だけで終わりました。たまに樺太にいたら今は何をやっているかなと思うことがあります。樺太に行ってみようとは思いません。戦争によって、人生が総狂いしてしまったのです。そのことが本当に残念でなりません。

DATA

平成21年度西区平和事業

聴き取り

- ・平成21年9月17日
- ・西区役所



笠松貞子(かさまつ・さだこ)さん

- ・昭和2年(1927年)生まれ
- ・札幌市西区在住